平成２６年　第１８回

江戸川区教育委員会定例会会議録

日　時：平成２６年９月２４日（水）午後１時

場　所：教育委員会室

	委員長	尾　上　郁　子
	委員長職務代理者	石　井　正　治
	委員	上　野　　操
	委員	松　原　秀　成
事務局	教育推進課長	柴　田　靖　弘
	学務課長	住　田　雅　一
	指導室長兼教育研究所長	松　井　慎　一
	学校施設担当課長	佐　藤　弥　栄
	統括指導主事	中　山　兼　一
書　記	教育委員会事務局	
	教育推進課庶務係長	丸　山　継　典
	同　主査	飯　田　常　雄

	開　会　時　刻　　午後１時
尾上委員長	ただいまから、平成２６年第１８回教育委員会定例会を開催します。 日程第１、署名委員を決定します。石井委員と上野委員にお願いいたします。 続いて、日程第２、教育関係事務報告にまいります。 平成２７年度区立幼稚園園児募集についての報告をお願いいたします。
住田学務課長	では、お手元の資料をごらんください。 来年４月入園の区立幼稚園の園児募集についてであります。募集人数につきましては、表にあるとおり、船堀１０５名、小松川、篠崎が７０名ということで、３園とも今年度と同じ人数を募集します。前回の区議会で閉園の条例が可決されました篠崎幼稚園については、平成２９年３月末で閉園されるため、４歳児の募集は今回が最後になるということであります。入園申込書の配付、それから受付日時、場所等はこの資料にあるとおりでございます。 最後の５番目の保育料等ということで、来年度の保育料の入園手数料の金額を書かせていただきました。これまでと変わらない金額を予定しておりまして、来年度から始まる子ども子育て支援の新制度には、区立幼稚園は移行しない予定となっております。私立幼稚園の一部がこの新制度に移行する予定ですけれども、私立幼稚園についても新制度に移行する園もしない園も含めて現在の保護者の負担している保育料の水準を維持する予定ということになっておりますので、基本的には私立も区立と変わらない保育料で、これまでどおり私立幼稚園に行けるような形になるということであります。これにつきましては、広報えどがわの１０月２０日号と区のホームページ等でお知らせをする予定となっているところであります。
委　員　長	何かご質問、ご意見はございますか。 よろしいでしょうか。 〔「なし」と呼ぶ者あり〕
委　員　長	他になければ、ただいまの報告事項を了承いたします。 続いて、平成２６年度「東京都体力テスト」結果【速報】についての報告をお願いいたします。

松井指導室長	それでは、資料Ａ４版横の両面刷りのものがあるかというふうに思いますので、ごらんください。 例年、いわゆる新体力テスト、同じ種目のものを実施しています。４月から６月までに実施したものを全学年、東京都へ報告をしています。全国のほうはその中から小学校５年生と中学校２年生を取り出してやりますが、その結果についてはまだ来ておりません。江戸川区の中で網掛けにしているものにつきましては、東京都の平均を上回っているものということで、握力が高いというのはちょっと、これ理由が何とも分析しがたいものがありますが、いわゆる種目の得点ということで言いますと、東京都の平均を下回るものが多いということでございます。 これまで各学校では、基本的には運動量を増やすということ、それから、正しい測定をすることということで取り組んでまいりました。裏面のところで、江戸川区の過去３年間の経年の状況を記させていただいておりますが、東京都全体との比較というよりは、江戸川区の中では、前年度より上回ったものが多いということは、学校が取り組んでいる成果が見えてきているのかなというふうには思っています。 体力テストにつきましては、学力テストと違いまして、毎回種目は一緒です。ですので、しっかり取り組めばその数値的なものは上がりますけれども、余りこれにこだわって体育の授業で練習させるということはしておりませんので、さまざまな子どもたちの体、動きをさせる中で、体力を高めて行きたいというふうに思っています。やはり、運動が楽しい、体力テストが楽しいという中から、大人になったとき、やらされている意識で、自分から運動するのが嫌だという子は育てたくないなとも思っております。 以上、この後、分析しっかりして、また学校ができる取り組みについて指導助言していきたいというふうに思っておりますので、よろしくお願いします。
委　員　長	何か、ご意見、ご質問ございますか。
石 井 委 員	持久走はどのくらい走ったものなんでしょうか。
指 導 室 長	男子が１，５００メートル、女子が１，０００メートルでございます。種目によって数値が大きいほうがいいものと、数値が少ないほうがいいというものがあります。５０メートルなんかは数値が低いほうがいいですし、持久走もそうです。数値が低いほうがいいのは、持久走、シャトルラン、５０メ

	ートル走になります。補足になりますが、中学校の持久走と２０メートルシャトルランは、基本的にはどちらか一方でいいというふうになっていますが、両方やっている学校がほとんどでございます。
上 野 委 員	これ、都内の検査を受けた、調査を受けた学校でほとんど平均以上のところ、一番ある意味では優秀な学校というのはどこなのですか。
指 導 室 長	すみません、学校ごとの分析、まだこれからですね。
上 野 委 員	地域的にどこなのかなと思って。周辺地区のほうが体が丈夫でいいような気がするけど。
委 員 長	何かグラウンドの大きさに比例するとかね、いろいろそんなのがあるのかなとか。
指 導 室 長	学校分析これからなのですが、実は、中央区は数値が高いんです。それで、私もちょっとここに関わった部署にいたものですから、そのとき言っていたのは、要するに、今の子どもたちの育ちの遊びの中からいって、果たして、ソフトボール投げとかハンドボール投げ、ほとんどやっていない区も多いんです。 ただ、体力テストだけは全国的に同じ種目でやっているものですから、要するに、いわゆる行動体力を見る指標としてこれが一つになっているんです。ただ、やっぱり本当に子どもたちの体力をどう見るかといったときには、さまざま本当はあるはずなんです。ですので、指標としてとらえていただきたいということと、江戸川区内の中でも、やはり学校の取り組みとして東京都の体力向上に優良校なんかもらっている学校、例えば西葛西小学校ですとか、やはりそういったところで重点的にやっていて、それが学校の取り組みとして、しっかり根付いたところが、やっぱり子どもたちの意識も変わります。そういったいい学校の取り組みを紹介する、さらにレベルアップ、区全体としてもレベルアップするといいますか、やっぱり子どもたちがもともと持っているいい力を引き出すということをしっかり取り組んでいきたいなというふうに思っております。
石 井 委 員	すみません、二つあるんですけれども、一つは春江小学校さんと松江小学校ですか、あと第二葛西小学校、この３校が校舎改築で体育的な授業等が制

	限されたと思うんですよね。その辺の数値は気になるところですね。機会があったら教えていただきたいということ。 　もう一つは、さっき室長さんがおっしゃったように、僕自身はこの数値というよりも、やっぱり体育の持っている、学習指導要領の目標にもなっているところの、生涯にわたってスポーツと親しむというか、そういう視点でとらえていかないといけないのではないかなという。もっと言うと、健康面ですよね。それにもっともっと関心を持っていくという点において、各学校でこのデータを活用していただければなというふうに思いますね。
指 導 室 長	特に小学校においては、教員が全科なものですから、やっぱり得意不得意が顕著に出ているところもあります。やっぱり子どもは体を動かすのは基本的に好きです。ただ、今の生活環境からいって、もう小学校段階で既に体を動かすことがちょっと億劫になってしまっているお子さんなんかもいて、そういった意味でやっぱり学校はしっかりやらせなければいけないと思っております。ただ、それを子どもが強制と感じないようなやり方でやるというのが指導技術だというふうに思っています。 　それから体育の授業の中で、さまざまな課題がある中で、体育の授業だけで確実にできるのは運動量なんですね。ですので、トレーニングをさせるということではないんですが、やっぱり子どもの活動量、運動量をしっかり確保する体育の授業の改善ということでも改めて学校には指導助言してまいりたいというふうに思います。
上 野 委 員	もう一つまた別のなんだけれども、不登校の生徒なんかはちょっとどういうふうに言えるか別として、出席率ですよね。それなんかも統計調査があったりすると、知りたいなと思っているんですけれども、あるんですか。
指 導 室 長	まとめたものはありませんが、学校は必ず出席簿で出欠をとっておりますので、ですので、それはこういうデータだということであれば、整理し直せば出てくるとは思います。ただ、各学校ごとになるものですから。
上 野 委 員	皆勤だ精勤だなんて言うけれども、病欠だとか、そういう健康に関係しているものね。不登校の場合とか、来なくなってしまった人までも平均に入れると、数字が正確ではないですけどね。健康面を見るのも一ついいのではないですかね。

指導室長	不登校調査というのは、問題行動調査というところでわかるんですが、学校基本調査というのがありまして、そちらでは、長期欠席者を必ず報告するようになっています。それは病気と不登校を分けております。そういうものもございます。
委員長	ちょっとよろしいでしょうか。グラウンドの広さというのは、生徒数に対して、一人あたりどのくらいなければいけないとかという基準なんでしょうか。例えば、これは私、多くの運動会見に行きましたけれども、１年生ぐらいだと徒競走も４０メートルとか、中には５０メートル、６０メートルぐらいもありました。高学年でも、要するに、１００メートルとれなくて７０メートルとか８０メートル。本当に全力で駆けて、先にマット置いていて、要するに危ないから、マットで受けてあげるというようなところもありました。 グラウンドの広さによって苦労されているなとは思いましたけれども、当然子どもが１００メートルのタイムをとれないだろうなと。要するに、まっすぐ直線とカーブは全然違うでしょうからって、そんなふうに思って見てきました。そういうことがやっぱり基本的な子どもの体力でもいろいろな形で影響してくるんじゃないかなという、そんな思いはしてきましたので、その辺はどうなのかなと思います。
指導室長	基準についてはわかりませんが、やっぱり各学校によって、条件の差はあります。当初建てたときの状況と近隣の住居の状況が変わっていたりすれば、今でも満杯になっている学校もありますし、減ってきて、少し空き教室がある学校なんかもありますもんですから。ただ、グラウンドの広さにつきましては、やっぱりそれは広いほうがたくさんの子どもたちが一度に遊ぶことができるとか、そういう条件はあると思います。
佐藤学校施設担当課長	今の敷地の話ですけれども、２３区的に平均で行きますと、小学校のときで大体８，０００平米ぐらいになっています。中学校については、約１万７００平米ぐらいですか、平均値ということになります。そういう中で江戸川区につきましては、平均より多くなっておりまして、小学校については１校あたり大体９，６００平米ほど、中学校については１万２，７００平米ということですので、一概に２３区で比較すると、それほど狭くはないという状況はございます。 先ほど、室長からの話で、中央区については小学校については４，５００平米ほど、中学校については６，５００平米ほどなので、グラウンドは江戸

	川区よりは狭いという状況なものですから、そういう状況はあるということです。
委　員　長	何か工夫されているのでしょうね、いろいろ。 あと、いかがでしょうか。 〔「なし」と呼ぶ者あり〕
委　員　長	では、ほかになければ、ただいまの報告事項を了承させていただきます。続きまして、平成２６年度「児童・生徒の学力向上を図るための調査」結果【速報】についてのご報告をお願いします。
指導室長	それでは、今度は東京都の学力調査です。小学校５年生と中学校２年生を対象に小学校で４教科、中学校で５教科並びに子どもの意識調査等を実施しておりまして、これは７月に実施した後、夏休みを利用して各学校が自己採点をして、ある程度の抽出、当該校にデータを送って、都の平均正答率等を出したものです。その結果が先日来ましたので、ご報告をさせていただきます。 小学校４教科、中学校５教科につきまして、いずれも東京都との平均正答率で言えば差があるということです。この分析はちょっと何とも言えないんですが、小学校で４教科平均で３．３ポイントあります。江戸川区は区立中学校に進学する者が大体８３％です。その子どもたちの平均的な学力を見ると、抜けた子どもたちの学力を見たときに、中学校にいって、平均ですけれども、都とのポイント差が縮まっているということをどう捉えるかなというふうに私は思っています。 何にせよ、この数値だけで学校を語ることはできません。今年度、国の学力調査の公表について、委員さん方にたくさんご議論いただきました。やはり生活リズムの問題ですとか授業規律の問題ですとか、学校ができること、子どもたちが自分で頑張らなければいけないこと、保護者や地域がしっかりやらなければいけないこと等をきちんと整理して、我々指導室はまず学校の教員の指導力向上が第一ですので、少しでも学力も含めて健全育成が推進できますように、今後も取り組んでまいりたいというふうに思っております。学力につきましては、個別を見逃さないでほしいということで、学校には今後も指導助言してまいりたいというふうに思っております。速報値は以上でございます。

委　員　長	ご質問、どうぞ。
上野委員	さっき言われたけど、ポイント差ですけれども、中学校のほうがポイント差が少なくなっているということでしょう。ということは、８０％の人が行くと。ほかと比べると、多いというわけですね。８０％というのはね。２０％が私立に行くんですよね。そうすると、潜在的には優秀な人がそのまま区立中学校に行っているというふうに見て、この差が出るということですか。
指導室長	一つは中学校の努力だというふうに思います。教科担任制になりますので、それはしっかり各教科、責任を持って指導しているということです。私立に行くお子さんは、学力は小学校時代、高い子が多いということです。その層が抜けて中学校に来て、東京都のポイント差が縮まっている。ただ、全都的に見たときに、江戸川区よりももっと私立に抜ける割り合いが高いということも考えられます。 何にしても預かった子どもをしっかりやっていくということしかないと。
上野委員	区立小学校から区立中学校へ行く人が８０％ということでしょう。だから、それは他区と比べるとその辺の数字は、江戸川区はどうなんですか。
指導室長	そこは確認できておりません。他区と比べたときにですね。
松原委員	今、室長さんがおっしゃったほうに、これ歴然としてわかることは、私なりに解釈すると、特に国語と算数・数学で比べてみますと、小学校では国語が３．４ポイント、算数が３．８ポイント。これが中学校で国語が１．２ポイントということなんで、かなり頑張っているなというふうに見ることができるのではないかなと思います。ところが、数学は、算数が３．８の３．２ですから、ちょっと多少いいんですけれども、まだ３ポイントの大台ですので、もう少しかなという感じがするんですよね。 今年の４月に第三次教育ビジョンが出されて、前回の学力調査の結果においても、小学校の５年生のこの調査のデータと中学校２年生の比べると、やっぱり中学校２年生のほうが伸びていないんですよ。そういう点で考えると、やはり算数、数学にちょっと力を入れるということが大事なのかなと思います。やっぱり外国語がちょっと厳しいなと。５．３ですから、ちょっとより重点なのかなと思います。

	やはりこの学力という問題については、何と言っても小学校においての学習習慣づくりというのがとてもすごく大事なことであって、その学習習慣が根付いてくれば、さらにそれが中学校に行って、多分、形成されていくと思うんですよね。その証拠が国語、社会、理科に見られるように、理科も１．５ポイントですから、かなり努力しているなと見ることができると思うんですよね。つまり、子どもたちの一人ひとりの学習意欲、家庭学習、学年上がるにつれて、やはり自宅でどれだけ努力できるかという、そういう環境ですね、考えていかなければいけないと思うんですけれども、もう少し、教科的に今申し上げた算数・数学、中学校の英語という点では努力する必要があるのかなというふうに思いますね。
上 野 委 員	松原先生の説明でよくわかったんですが、じゃあ、具体的な原因というか理由ですけど、なんで算数が伸びないのかわかっているんですか。
指 導 室 長	よく、算数・数学は積み重ねの教科というふうに言われます。中学校で小学校の四則計算の土台で、だんだん具体物から抽象物の計算になっていきますが、その四則計算みたいなものができていないと、土台がなくなっちゃうんですね。教科によっては、自分の興味のあるところからトピックスで入ることもできる教科もありますが、算数・数学については、そういうところがあるものですから。
上 野 委 員	そうだとすると、土台だというのだったら、小学校のときにしっかりやるということが対策になるでしょう。中学で頑張っても仕方がないというと言い過ぎだけれども、土台づくりだったんじゃあ、小学校で算数をきちっとやるということですよね。ということになりますよね、対策を考えると。それから、外国語は初めて中学校になって出るわけだけれども、これがちょっと差が大きいというのは、どういうふうに江戸川区の場合、改めて分析しているんですか。
指 導 室 長	分析はこれからですけれども、基本的に授業改善だというふうに思っています。もう１０年ぐらいになりますけれども、要するに、文法英語からコミュニケーション英語というふうになったときに、なかなか授業改善ができないようです。 江戸川区としては、外国人助手ですね、それを比較的早くから派遣して、小学校段階から慣れるような取り組みをして、今は５、６年生かなり手厚く

	やっています。逆に、中学校はもう専門教科の教員ですから、自分でしっかりやるようにという舵を切っています。ですので、これについては今回こういう結果でありますけれども、子どもたちに力をつけるということの基本は授業改善ですから。それについても継続して取り組んでいきたいなと思っています。
上 野 委 員	石井先生にお話聞きたいんですが、外国語のことについては、何か改善点はありますか。
石 井 委 員	そうですね、やはり私なんかは文法英語から入ってしまった口なので、会話などではかなり苦労して、自分なりに工夫なんかもして勉強しました。学校公開なんかで行きまして、英語の授業を見ますと、きちんとネイティブのＣＤなりテープなりを使った授業というのをやられているので、そこら辺はすごくいいなと思うんですよね。ただ、生徒を見ていますと、ぼそぼそっというような声で、それでは会話は通じないだろうとしきりに思えてしまうので、なので、やはり家庭でのサポートといいましょうか、そんなところがすごく必要なんだろうなと思っています。 全体としては、授業がコミュニケーションをするための、そのための語学なんだと。語学のための語学ではないという意識付けが全体としてしっかりできているように思いますので、方向は悪くないと思うんですよね。ただ、私自身も４９．４で５．３ポイント開きがある。中学１年の英語ですので、そうすると、ちょっとまずいなという考えはあります。
上 野 委 員	今の家庭でのサポートってお話ありましたけれども、具体的に言うとどういうことになるんですか。
石 井 委 員	具体的には、やっぱり音読だと思うんですよね。何遍も何遍も音読をして、音読を続けていけば学校で１回は入っていますので、それなりに流暢にはなっていく。ちゃんと暗記した後で、今度は自分で教科書の文面を空で書いてみるぐらいのところをやれば、もう英語が英語として頭の中に入ってくるようなことにもなると思いますので、そんなことをサポートされるといいと思います。
委 員 長	よろしいでしょうか。 私もこの外国語、とても気になりました。１年間の、初めて習ってその差

	で５．３ポイントということで、非常に気になりますけれども、もう一つの考え方として、今、英語の授業というのは、小学校から２週間に１回ぐらいですから、このときには会話を中心に外国の先生が来て、子どもたち結構元気にやっている状況というのは見受けるんですが、要するに、区によって、外国語の学年が結構低くから学ばれるところもあるようですよね。 　ですから、そういう子どもたちがやはり難しくもないような、そういうような言葉をかわせられるような年齢ってありますよね。結構、高学年になってくると、さっきみたいにぼそぼそみたいな、そういうふうになるけれども、そうではなくて、本当に元気はつらつ、コミュニケーションかわせるような低学年、そういうところからきちんとした形で、もう少し手厚くやれれば、もう少し中学入っても導入というコミュニケーションになっている部分の中で、子どもが英語を好きになるというのでしょうかね、使える、好きになるということから少し出発できればもう少し改善できるんじゃないかなと。 　やはり好きという、伝えるということはとても私は大切なことじゃないかなって、学問のためのというだけではなくてね。そういう視点でもちょっと考察をしていただければなと、そんなふうに思っています。よろしくお願いします。 　あと、いかがでしょうか。大丈夫でしょうか。 　〔「なし」と呼ぶ者あり〕
委　員　長	ほかになければ、ただいまの報告事項を了承させていただきます。そのほかの報告事項はございますか。 　それでは、以上をもちまして、平成２６年第１８回教育委員会定例会を終了いたします。ありがとうございました。 閉会時刻　午後１時３５分